姉が行方不明になったのはもう四年も前のことだった。
連絡がとれない、と焦り散らかした声で母が電話越しに話すのを聞きながらも、わたしはあまり驚かなかった。むしろ、やっぱり、とすら思った。二週間前に送ったメールへの返信がわたしにも届いていなかったというのもあるけど、自由過ぎる気が前々から姉にはあったからだ。
そして今、まさかまた会える日が来るとは、と思っている。
姉を捜索しなかったわけじゃない。だけど、興信所というのは結構な金額がかかるもので、一般家庭である榎井家には、もういい歳した大人を探す心理的余裕も経済的余裕もなかった。半年間探しても見つからなかったのだから仕方がない、という結論に結局は落ち着いた。だれも異を唱えなかった。もちろん、わたしも。
ただ、わたしは悲観しなかった。どうせ元気にうまくやっているだろう、と根拠もなく思えるくらいには姉を信用していた。両親は姉を愛していたからそうは思えなかったようだ。
わたしはカレシとさつまいもスイーツ専門店でさつまいもブリュレを頬張っていた。互いに二個目だった。そんなところに入ってきた短髪の女が、姉だった。
「姉さん」
「え」
カレシには姉にまつわる事情を既に話していた。だから、一番近くにいてわたしのつぶやきを聞いた彼が一番最初に驚いた。姉は一度では気付かなかった。店員に注文していた。カウンター内に貼られた大学芋の写真を指差していた。もう一度、言う。
「朝喜姉さん」この一言に跳ねられたように、姉はぱっと振り向いた。やはり姉だった。
「……。夕香？」姉は妹が目の前にいることが信じられないようでいた。それもそうだ。
「……よく似てる」カレシは私と姉を三往復ほど見たあとにそう言った。いま言うかな。

× × ×

ケータイの電源を落としたのはツーショット写真を父に送ってからだった。
市街地を抜けて山の方に入り、十分もしないうちに車は止まった。わたしたちは電車で笠間に来ていて、姉は車で来ていた。姉の車が止まったのは古びた一軒家の敷地内だった。庭はよくきれいに手入れがされていた。姉らしからなかった。
「どうしてここに住んでるの？」
「ジョン・バリモアの横顔を描くため」
言葉だけではまったくすこしもわからなかった。ジョン・バリモアがなんなのかも。だけど部屋いっぱいにある絵を見て理解した。絵はクロッキー帳の用紙に描かれていたり、美術館にあるような立派なものにかかれていたりした。ジョン・バリモアとは人物の名前で、たしかにおかしくしてしまうほどの価値がある美麗さだと思った。